

【教育ノート】

子育て広場における臨床心理学実習の 実践報告

—大学生の親性教育の試みについて—

谷向 みつえ

A practice report of the clinical psychology training in the child care open space
: The education of undergraduate students' readiness for parenthood.

Mitsue Tanimukai



2010年3月

総合福祉科学研究

Journal of Comprehensive Welfare Sciences

【教育ノート】

子育て広場における臨床心理学実習の実践報告

—大学生の親性教育の試みについて—

谷向 みつえ*

A practice report of the clinical psychology training in the child care open space : The education of undergraduate students' readiness for parenthood.

Mitsue Tanimukai

I はじめに

—子育て広場における実習教育を立ち上げるまでの経緯—

2007年、大阪府柏原市は都市基盤整備事業であるJR柏原駅前再開発ビルの公益施設棟に子育て広場を設置することを決議した。この広場の開設に際して市は本学に運営・活用方法について連携協力を依頼し、それを受けて本学は学内から募集したプランから5項目を選び市に提案することとなった。その中の1つが「地域と大学が連携して未来をひらく次世代を育成していくプログラム」であり、その実施内容の1つが「子育て広場における大学生の体験実習教育」である。

このプログラム全体の目的は(1)現役子育て世代への支援、(2)発達段階から見て親になる前段階の世代という意味に照らして「プレ親世代」である学生の人格的成長、(3)地域住民の生涯学習的効果と子育て支援のための人的資源の開拓、(4)福祉・教育等の現場における新たな試みの展開、(5)地域活性化である。「学生の体験実習」は、これらの主に(2)プレ親世代である学生の人格的成長と(1)現役子育て世代への支援に該当する。つまり現役子育て世代の支援の場である広場に学生が入り乳幼児の遊び相手となったり母親の世話の補助をすることが広場利用の親子の直接的支援になると同時に、乳幼児とふれあったり母親の話を聞いたり親子と交流することが学生の人格的成長、「親性」の発達に深く寄与されることが期待されたことであった。市は、次世代育成支援の観点からこの子育て広場における大学生の実習教育の案件を採用し本学と連携しながらすすめていくことになった。

かくして2007年11月19日、子育て広場「ほっとステーション」は開所された。運営は地区福祉委員、民生児童委員、主任児童委員、行政協力委員、本学教職員等からなるほっとステーション運営委員会が担い、柏原市が財政面を負担すると共に、健康福祉部から専任保育士2名と非常勤保育士1名を配置した。開所時間は年末年始を除く月曜日から金曜日の9時から5時、その間は保育士3名と地区ボランティア2名が常駐する。子育て広場に専任保育士が2名も常駐されるのは本学の実習生の受け入れ態勢を整えるためでもある。1年余りの準備期間を経て2009年度春から、本学社会福祉学部臨床心理学科の学生が「臨床心理学実習Ⅲ」の科目内において選択制で子育て広場における体験実習を行う運びとなった。

なお、開設から1年を経た2008年11月19日には1119組の親子が広場の利用登録をし、2009年3月末現在の延べ利用者は2万人を超過。1日あたりの平均利用者数は91名(保護者42名、乳幼児49名)、生後1ヶ月から3歳までの乳幼児と保護者が主な利用対象である。

II 今日における「親性」を育てることの意義

—一次世代育成支援の観点から—

子育て広場において大学生が乳幼児親子と交流する体験の意味は何であろうか。発達心理学の領域では、親としての資質を「親性」という概念で捉え、親性の形成に関する知見を蓄積してきた。「親性」とは、性

* 関西福祉科学大学 社会福祉学部 准教授

別や年齢、能力に関係なく、また生みの親か否かにも関わらず、すべての人がもつ「育ち行く命である子どもを親として慈しみ育もうとする心性」、あるいは「次世代の再生産と育成のための資質」（伊藤，2006）と定義されている。他にも「親になる準備性」（中西・牧野，1989）、「次世代育成力」（原，1991）、「育児性」（大日向，1991）、「養護性：nurturance」（小嶋，2001）といったことばも同様の意味を表す概念として用いられている。このような「親性」の形成は、従来の比較行動学や発達心理学等の研究から、本能によってのみ規定されるものではなく、むしろ生育過程において育成されていく面が大きいと考えられている。つまり親になるプロセスは、人格形成の一環として生来的な基盤の上に幼少期からの体験が積み重なって形成されていくものといえる。例えば、幼少時に子どもの世話をしたり遊んだりした経験が多いこと、また自分が母親からやさしく世話を受けたと認識していることが、母親の子ども好きや子どもについて肯定的なイメージと関連があることが見出されている。また、男女を問わず親準備性の高い者は、低いものに比して赤ちゃんを抱いたりおんぶした経験、子どもと遊んだり世話をした経験をより多くもつことが明らかにされている（中西・牧野，1989）。

昨今、母子保健や保育・心理臨床など子育て支援や親支援の現場において、育児下手や育児不安の親の増加・児童虐待の深刻化への危機感から、「親になってからでは遅い。親になる前から支援を開始する必要がある」といった声が聞かれる。これらの状況を緩和するために、妊娠・出産を経験するよりもはるか以前の発達段階で乳幼児と遊んだり世話をする体験を積み、すなわち親になるための準備を始めることの重要性が指摘されている。思春期からの「親性準備性」の育成を目的として、平成10年から順に中学、高校と家庭科の学習指導要領には保育体験学習を導入する等の取組みが推進されてきた。他にもボランティアや職業体験等で年少児と交流する機会を組み入れるなどの努力が教育現場でなされている。それでもなお経年変化の研究から、幼児とかかわる母親の行動が子どもの視点に立てなくなったという報告や、母親の不安が増大し育児行動が変化したという調査報告が後を絶たない。子育ての窮状は想像以上に速いスピードで深刻化し何らかの対策が必要である、と子育て臨床の現場で

は感じ取られている。

本実習の試みも、次世代育成を担う大学生個人の人格形成としての親性の涵養という広汎な目的を背景に据えている。次世代育成支援を視野に入れた上で、臨床心理学の専門教育の一環として子育て広場という場を有効に活用し、教育内容の充実を図ることを目的とするものである。

Ⅲ 「臨床心理学実習Ⅲ」の授業目的と内容

1. 授業目的

本学臨床心理学の臨床心理学実習はⅠ～Ⅳまであり、コミュニケーション・スキルを学ぶことに始まり、各種心理療法の理論と技法について体験的に学ぶことを目的としている。履修年度は3年生から4年生で、臨床心理学実習Ⅲは4年生春学期開講の必修科目である。学外実習と学内での実習講義（「認知行動療法の基本スキルおよびSSTに関する実習」）との選択制をとり学生は自由に選べるようにしている。これは、本実習が資格取得要件となるものではないこと、対象となる広場利用者親子への配慮、広場の収容者数の限度、学生の動機付けや意思を尊重してのことである。2009年度に履修した学生は臨床心理学64名であった。

シラバスに提示されている本科目の主題と目的は、「臨床心理学的な視点をもって、地域と交流してみよう：柏原市の子育て広場ほっとステーションで、乳幼児の親子とかかわる体験を通して臨床心理学的視点から子育てを支援する意味や方法について学び考えを深める。また受講学生の異世代の人とかかわる力、親性を養うことも目的とする。」である。

学生が修得をめざす本科目の臨床心理学的課題は、次の3項目である。

- ① 他者とかかわる：これまでに習得したコミュニケーション・スキルを実践して、乳幼児や保護者、中高年の地域ボランティアとのコミュニケーションを図る。
- ② 乳幼児の発達を知る：これまでに学んだ発達心理学の知識を基に、実際に0歳から3、4歳の乳幼児と交流することで人格形成の基盤となる発達早期の様相について知る。
- ③ 「支援」の意味を考える：子育て広場はより広い

意味での支援としての役割を担うが、その支援は必ずしも直接的ではなく見守りが中心で予防的な意義が大きい。対象となる利用者も一般の健常な親子が多い。個人療法や、医療モデルに則らない心理的支援の場を体験することから、「支援」の意味について改めて考える。

いずれの課題もハードルはそれほど高くなく、資格と関連しない実習ということで実習目的が漠然としているように見えるが、臨床心理学教育の集大成の1つとして基礎から応用にまで通じる課題である。

2. 授業計画と実習の枠組み

2009年度の授業計画を表1に示す。学期の初めは、支援事業と施設の概要、子どもの発達と親子関係、実習に際しての注意事項等の講義を行ない、実習担当の保育士もゲストスピーカーとして講義に参加した。

広場での実習は、2時間を1単位として合計5回・計10時間を課すこととした。実習の時間帯は1日を3枠に分け1枠につき7人までと制限したうえで、学生が各自、時間を予約して行くようにした。実習の翌週は学内でカンファレンスの時間を持ち、より望まし

表1 臨床心理学実習Ⅲの授業計画

1	4/13	オリエンテーション
2	4/20	子育てを支援する臨床心理学的な意義について
3	4/27	子育て支援の概要—子育て広場について—
4	5/11	乳幼児期の子どものすがた
5	5/12 ~ 5/22 (①ターム)	学外現場実習① 広場に行ってみよう!
6	5/25	カンファレンス(1) 学外現場実習①の振り返り
7	5/26~6/5 (②ターム)	学外現場実習② 広場の様子を観察してみよう!
8	6/8	カンファレンス(2) 学外現場実習②の振り返り
9	6/9~6/19 (③ターム)	学外現場実習③ 子どもやお母さんとかかわってみよう
11	6/22	カンファレンス(3) 学外現場実習③の振り返り
10	6/23 ~ 7/10 (④ターム)	学外現場実習④ 子どもやお母さんとかかわってみよう
12		学外現場実習⑤ 広場の意味について考えてみよう
13	7/13	カンファレンス(4) 学外現場実習④⑤の振り返り
14	7/24	現場での体験を振り返って
15	7/27	まとめ —支援の意味を考える—

い対応や疑問点について感想や意見交換をして振り返りを行なった。また毎回実習記録を書き、実習担当保育士に現場における指導を依頼した。

表2 体験実習のポイント

<p>①広場に行ってみよう：広場の様子を観察してみよう。 どんな親子が利用しているのだろうか。広場に来て、何をしているのだろうか</p> <p>②子どもとかかわってみよう 0・1・2・3歳児、それぞれの発達のすがたはどのようなものか 子どもの気持ちや行動の意図を推し量ってみよう その子どもの気持ちや意図にそってかかわってみよう</p> <p>③お母さんとかかわってみよう お母さんは子どもとどのようにかかわっているのだろうか 広場に来て、お母さんはどのような気持ちでおられるのだろうか お母さんと世間話をしてみよう、子育ての話聞いてみよう</p> <p>④広場の意味について考えてみよう これまでの実習から何ができてきたか。広場のスタッフの果たす役割は 現代のわが国の状況において、子育てに広場の意義とは</p>

実習生が広場に入らせてもらうことは、ほっとステーション運営委員会で報告され、お母さん方へも保育士から通達されている。しかし実習の目的などは伝わりにくく、学生とお母さん方の交流も距離感が感じられたため、実習2回目のカンファレンスで、学生から

お母さん方への一言メッセージを書き広場に掲示してもらうこととした。それに対してお母さん方から学生へに対して一言メッセージが返され、まとめの授業時に届けられた。学生とお母さん方からのメッセージの一部を表2に示す。

表3 お母さん方から学生への手紙

- 特に大人に対して、人見知りする娘が笑顔一杯で遊んでもらっている姿にすごく驚きました！！娘の新たな一面が見れて私自身も、とても嬉しく楽しかったです！！いっぱい遊んでくれて本当にありがとうございました。また、こういった機会があれば嬉しいです。
- 普段は恥ずかしがり屋で、ほっとステーションに入るのも大変ですが、学生さんのお兄さんお姉さんのおかげで、ためらわず入れるようになりました。一人のお姉さんにつきっきりで遊んで頂きました。ありがとうございました。
- 子どもに、たくさん本を読んでくれたお姉さん、一緒に走り回ってくれたお兄さん、「かわいい」と言ってくれたお姉さん…皆ありがとうございました。普段は、3人のうち誰かがくっついて、お手洗いにも行きにくいぐらいの私ですが、皆さんが遊んで下さっている間は、安心して離れられました。ありがとうございました。私は、子どもと毎日過ごして「子どもって、すごいな」と思う事が多いです。皆さんも一度ご両親に、ゆっくりお話を聞いてみたら、また新しい発見があると思います。
- ほっとステーションに来るたび、いつも優しく楽しく、子どもと遊んで下さって精神的にも肉体的にもすごく支えてもらいました。本当にありがとうございました。
- いつも子ども達と遊んでくれて、ありがとうございます。子どもの手が離れて少し休む時間をいただけてホッとします。ありがとう。
- お姉さんお兄さん、いっぱい子ども達と遊んでくれて本当にありがとう！お姉さん達は笑顔で接してくれて楽しそうに喜んでくれるわが子にとって、ありがたかったです。お兄さん達は体を使って元気に走ったり抱き上げてくれたりと、大喜びしている姿が印象的でした。
- 優しいお兄さんお姉さんが一緒に遊んでくださりわが家の子ども達は大喜びでした！ありがとうございました。まだ8カ月の子のお世話を積極的にしていただいたおかげで、普段なかなか、上のお兄ちゃんと向き合って遊んであげられなかったので私自身も嬉しい時間をいただいたと思います。お兄さんお姉さん、将来の夢に向かって頑張ってください！！ありがとうございました。
- 子どもといっぱい遊んでくださって、ありがとうございました！！学生さんを見て、お話をして、純粋に子どもが好きというのは素晴らしいことだと感じました。子どもと同じ目線で、それだけでも十分だと思います。これからも勉強頑張ってくださいね。
- わが子と遊んでくれて、ありがとう！！ゆっくり喜ぶ顔が見れました。色々、就職の悩みやら…将来の事を聞きました。悩むより、とりあえず何かをやる（笑）せっかくの学生生活楽しみましょう！！いいな…若いし（笑）
- 実習お疲れ様でした。慣れない子どもと遊ぶのは大変だったでしょうね。でも子どもは優しいお兄さんお姉さんと遊べて喜んでいました。最初はどうやって話し掛けようか、遊んだらいいのか分からなくて、見ているだけだったのが少しずつ慣れてきて成長してきているのが分かってきました。まず自分から声を掛けて笑顔を見せてあげてください。ほっとステーションで学んだ事を生かして、卒業後も頑張ってください！
- 毎日の子育てに、ちょっと疲れ気味のママに代わって、たくさん遊んでくれてありがとうございました。希望の就職先に就けるように祈っています！頑張ってください！！
- ママとの遊びとはまた一味違い、とても楽しく遊んでもらっていました。輪投げも一緒に遊んでもらい、喜んでいました。

IV 実習に対する学生の意識と評価

1. 学生の親準備性に対する実態

学生の乳幼児とのふれあい体験の実態を把握するために、授業開始時に質問紙調査（「子どもとの接触体験（佐々木ら，2007）」ほか）を行なった。

臨床心理学科4年生全体の子どもの接触体験は、

乳幼児を抱いた経験がよくあると答えた学生は22.0%、まったく経験がない学生は19.5%であった。遊んだ経験がよくあると答えた学生は、0歳児20.2%、1～3歳児34.5%で、遊んだ経験がないと答えた学生は0歳児32.2%、1～3歳児10.9%であった。およそ3分の2以上の学生が乳幼児との接触体験を持っていることになる。

表 4 臨床心理学科4年生の子どもの接触等の体験 (%)

	よくある	1度～数回	経験なし
乳幼児を抱いた経験	22.0	58.5	19.5
0歳児と遊んだ経験	20.3	47.5	32.2
1～3歳児と遊んだ経験	34.5	54.6	10.9
大学でのボランティア経験	17.6	17.6	63.0
障害者介助の経験	10.9	25.2	63.0
高齢者介護の経験	6.8	23.7	69.5
ペットの世話の体験	51.7	17.8	30.5
ほっとステーションボランティア経験	0	10.1	89.9

2. 子育て広場での体験から学生が得たこと

①乳幼児とかかわる、乳幼児の発達を知る

お母さん方の理解と地域ボランティアやスタッフの協力もあり、ほとんどの学生が赤ちゃんを抱っこする経験をさせてもらった。1、2ヶ月の赤ちゃんを抱かせてもらった学生も少なくなく、「首が座らない」という状態を初めて実感したという感想があった。また、人見知りの時期の子どもが多いため、なかなか近づかせてもらえないことを経験した学生も多く、そこから乳児の母親への愛着と知らない人への警戒を実感したり、反応の違いから子どもの個性の幅を観察する学生もいた。また子どもの遊び方や興味・関心の方向性から、発達段階の諸相を理解する学生も多かった。

かかわり方に関しては、赤ちゃんに泣かれて困ったり、ことばがしっかりと話せない子どもへの対応に苦慮した学生が多く、当初はぎこちなかったかかわりも非言語的コミュニケーションを駆使しながら次第に距離を縮めていったようである。

②お母さんとコミュニケーションをとる

学生にとってお母さんとコミュニケーションをとることは、子ども以上に難しかったようである。しかし回を重ねるうちにチャレンジする学生も増え、話してみると好意的に話してくれるお母さん方と子育ての苦労や妊娠、出産、結婚まで話が広がっていく者も多かった。しかしただ世間話をするのではなく、その会話から母親の大変さや悩みなどを感じとり、広場の意義へと考えを深めていく学生も多かった。

③「支援」の意味を考える

医療や専門的な相談機関の個人療法などとは対極にあるような子育て広場で行われている支援について、

学生は色々な意味を感じとっていたようである。広場に来る目的も千差万別で、午前は保育士が一斉に行う体操や手遊び、絵本などを目あてに来る母親が多いなど時間帯によって親子の雰囲気やニーズが異なることを指摘する学生も多かった。それら母親の様子に合わせてさりげなく保育士が声をかけたり配慮する姿を捉えている学生も多かった。

V まとめ

子育て広場での実習という好機に恵まれ、それを学生の教育に活かそうと試みる取り組みについて実践報告をした。授業でなくてもボランティアでもいいのではないかという声もあろうが、当初、市の保育士の提案はカリキュラムの中に組み込める方法はないかということであった。この真意はやはり動機付けの高い学生だけではなく、あまり子どもに興味のない学生に対してこそ、乳幼児親子とかかわる経験をして欲しい、という親性育成への願いがこめられていたように思う。また、教養課程の学生や保育士などを志望する学生等を対象とする方が望ましいとも考えられるが、「育ち」を対象とする心理臨床に携わる一人としては、生身の人間を対象とする臨床心理学の専門教育にも充分活用できるという感触をもって臨んだ。

学生の感想の中にも「就職等で忙しい時期ではあったが、4年生のこの時期だからこそ見えてくるものもあった」と書かれていた。この実習は講義で学んだ理論やスキルを、実践的に応用しながら体得することに活用できたのではないかと考える。また、「人を育てる」「育つ姿をみる」ということは、わが子に限るものではなく、社会の中で生きていくうえで必要な営みと言える。今後さらにこの実習を、学生が自ら社会と関わり経験し学ぶ場、人間的成長を得られる場として、次世代を担う学生の教育に活かしていく方法を考えていきたい。

引用文献

- 原ひろ子・館かおる（1991）：母性から次世代育成力へ
産み育てる社会のために，新曜社．
- 伊藤葉子（2006）：中・高校生の親性準備性の発達と保育体験学習 風間書房．
- 小嶋秀夫（2001）：心の育ちと文化 有斐閣．
- 中西雪夫・牧野カツ子（1989）：高校生の「親になることの準備状態」と保育教育—「準備状態」の形成に影響を与える要因，日本家庭科教育学会誌，32, 55-59.
- 大日向雅美（1991）：「母性／父性」から「育児性」へ
原ひろ子・館かおる（編）母性から次世代育成力へ
産み育てる社会のために 新曜社，
- 佐々木綾子・末原紀美代・町浦美智子・中井昭夫・波崎由美子・松木健一・田邊美智子（2008）：青年期の親性を育てる「乳幼児とのふれあい育児体験」の男女差に関する研究：心理・生理・内分泌学的指標による検討
福井大学医学部研究雑誌，8, 17-29.